

主体的・協働的に学び合う子の育成 ～子供主体の授業づくりを通して～

1 研究主題の設定理由

予測不可能な未来を生きる子供たちには、「何を知っているか」よりも「どのような問題解決を成し遂げられるか」という力が求められており、学校では、実社会で生きて働く力である資質・能力を身に付ける必要がある。さらに、日本が提唱する未来社会のコンセプトである Society5.0 には、社会課題と経済発展を解決する超スマート社会が提示されており、その実現のためには、教師と児童が各教科等で ICT を効果的に活用した授業を行っていくことは不可欠とされている。さらに、社会構造の急激な変化とも言える SDGs, イノベーションなど、多様な技術、多様な思考が世界中で波及している。その変化に対して前向きに受け止め、社会や人生、生活を人間ならではの感性を働かせて、より豊かなものにする必要がある。学校現場においても、発達障害及び不登校の児童が増加する中で、学力の差、家庭環境の違いが浮き彫りになってきた。児童個々に応じた学習支援の一層の充実が必要になってくる。

中央教育審議会『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」では、急激に変化する時代の中で育むべき資質・能力として、「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められています。」と提起されている。つまり、今までの教師自身が授業中に一番思考している教師主導の授業ではなく、児童一人一人の特性や学習状況に応じた指導・支援が必要になってくるということである。

昨年度は、「主体的・協働的な学び～伝え合いを通して、教科の資質・能力を育成する後半充実型の授業づくり～」を研究主題、副題として、国語科の資質・能力を児童に付けさせてきた。児童からは、叙述を根拠にして明確に考えをもつ姿、目的を明確にして交流する姿、授業の後半のまとめ、ふり返りの時間に自己の変容や他者からの学びを書いたり、伝えたりする姿が見られた。しかし、一方で教師が一番、発問や問い返しを発したり、児童の考えを板書に位置付けたりする授業が多いように思える。教師と児童が同じ課題を考え、同じ方法で、同じ着地点に向かう。それでは、児童の意欲の高まりや思考の深まりがあるのかという壁にぶつかる。昨今の教育の風潮の変化を鑑み、児童が自ら問いを見出し、解決方法を模索し、思考しながら学習を進めていける授業づくりが必要なのではないかと考えた。

一斉授業のよさもある。学習への学ぶ姿勢、ノートの書き方、全員参加での高め合い、授業の中で考えを変容させる姿は一斉授業でしかそろえられないであろう。そこに、個別最適な学びを強化し、児童一人一人に焦点を当てて、児童自らの足で解決できる力を加えていきたい。昨年度まで ICT の活用が広まったことで、児童がタブレット端末等を使用し、自己の考えを表出し、児童同士で意見を集約したり、吟味したり姿も見られた。ここから、本校児童には自ら問いを見つけ出し、自らの足で踏み出し、進んでいけるような土台は備わっていると考える。

そのためには、「学習環境の充実」は欠かせない。児童が自らの問いを見つけることができる導入を工夫し、学習の手段や方法を事前に教師が想定し準備をしておく。そうすることで、児童一人一人の必要感が高まり、解決意欲が湧くものとする。教科書で考える児童、ノートにまとめる児童、ワークシートで整理する児童、友達と相談しながら考える児童、さまざまな姿が見られることを期待する。

2 研究の方向性

本校は3年間、国語科を軸として、児童の主体的、対話的、協働的に学び合う姿をめざしてきた。説明的文章に重点を置いた研究では、児童が根拠を明確にして自分の意見をもったり、資料をもとに相手に伝えようとしたりする姿が見られた。また、昨年度の文学的文章に重点を置いた研究では、児童が登場人物の人柄や心情を想像したり、場面の様子から物語の起承転結を考えたりする姿が見られた。国語科の研究の最も大切なのは、資質・能力を明確にした言語活動の設定である。言語活動を工夫することで児童は見通しをもったり、意欲的に学習したりして、単元を通して資質・能力を育むことができる。

今年度は、これらの積み重ねをさらに延伸し、国語科の資質・能力のさらなる獲得をめざしていきたい。これまでの国語科の積み重ねを土台とした「子供主体の授業」である。前述した通り、本校では未だに教師主導の授業が多い。資質・能力を育むために、教師が授業の中で立ち止まり、考えを集約したり整理したりする姿がある。ここまでの積み重ねを信じ、児童が自ら問いを見出し、学習手段を選択し、課題解決する指導と評価の充実が必要である。

「子供主体の授業」では、単元の導入が最も大切であると考えている。教材を通してどんな疑問が出てきたのか、何か思ったことはないのか、そうした目線で児童から湧き出てきた問いが単元を貫く原動力になる。今までは一つの課題を教師と児童で共有して学習を進めてきたが、来年度は児童一人一人の問いを大切にしたい導入をしていきたい。

また、問いを解決する方法や手段も児童に委ねていく。教科書を使って学習する児童、タブレット端末を活用する児童、児童自身のノートに書き込む児童、ワークシートに書き込む児童、様々な方法や手段の選択肢を用意して、教師が児童のサポート役に徹する。そのためには、学習環境の充実が欠かせない。学習に必要な掲示物、教材やワークシートの電子化、紙媒体等、児童の思考の選択肢分、教材準備が必要である。さらに、単元全体を通して評価計画も重要である。今までは、単元の1時間で児童の資質・能力を見取ってきた。知識・技能や思考・判断・表現力等は、児童の発言やノート等で評価できたが、主体的に学習に取り組む態度に関しては、1時間では到底見取することはできなかった。そのため、よく発言する児童、ノートにたくさん書いた児童を評価することが多かった。来年度からは、1時間単位ではなく、単元全体を通した評価を計画することで、児童が粘り強く学習する姿や自己を調整しようとする姿を教師自身が見取っていけるようにしたい。

本校の「子供主体の授業」とは、「児童自らが、問いを見出し、自分の選択した方法や手段で、解決していく授業」である。その中で、壁にぶつかり、先に進めなくなったとき、児童自らが友達や教師を頼り、コミュニケーションを図りながら、解決の糸口を見つけていく姿も見られるだろう。そこにこそ、本校がめざす協働的な姿が垣間見えることになる。今までは、教師が目的を明確にした交流場面を設定してきた。しかし、児童によっては、交流に必要感をもてない児童や交流したいタイミングの差が生じた。児童自身が、解決のために必要感をもって交流する姿を創出していきたい。

ここまで研究の方向性を述べてきたが、本校のめざす「主体的・協働的に学び合う子の育成」につながる仮説を立てるならば、「教師が単元のつきたい資質・能力や学習の見通しを児童と共有し、単元の導入で児童に問いを見出させ、さまざまな学習の方法や手段の選択肢を準備して、学習させることで児童に生きて備わる資質・能力を育むことができる。」である。

3 研究用語の定義

「主体的」・・・・・・・・ 個の力。教材と向き合い、粘り強く「問い」から「解決」の往還すること。また、自己の学習ペースを考えて調整すること。

「協働的」・・・・・・・・ 集団の力。児童と児童の「伝え合い」、「教え合い」、「コミュニケーション」「情報交換」を通して学び合うこと。

「子供主体の授業」・・・児童自らが問いを見出し、自分の選択した方法や手段で、解決していく授業のこと。

「学習環境」・・・既習の学び、関連図書の位置付け。ノートやワークシートの工夫、ICTの活用など、児童が自ら問いを見出し、解決する手段や方法を想定した学習環境のこと。

4 学年研究を軸とした校内研究の推進

本校の研究主題に迫るためには、学年団の結束と協力が必要になる。それは、学年の児童の実態に応じた研究への手立てや指導の工夫が必要になってくるからである。教師個々の経験や指導方法だけでなく、学年団として多面的・多角的な視点で教材を研究し、目の前の児童に合ったオーダーメイド的な指導が必要である。さらに、柔軟かつ行動力がある若手教員と経験豊富であり、熟練の技をもつベテラン教員とが融合することで、校内研究のさらなる推進を図ることができる。

加えて、ICT活用に関する教材研究の際には、一部の教師が単独で計画し実施するのではなく、ICT活用に関しての情報を交換し、学年全体で実践を積み上げるように協力していく。

学校全体	学年	学級
全体研究会（年5回） 全体研究授業（年3回） 県国研公開授業（11/13）	学年研究会（隔週・火曜日） ・朝学習の内容の確認 ・授業改善の振り返り ・教材研究や教具の準備 ・ICTの情報交換 等	研究授業（一人1回） 各種研修会 若プロ研修会 等

5 研究の重点

校内研究の「主体的・協働的に学び合う子の育成」に迫るために、2つの重点を置く。「主体的に学ぶための手立て」及び「協働的に学び合うための手立て」である。その具体的な方法の1つとして、国語科において「複線型の単元構成」の授業づくりと実践を通して、研究主題にせまっていく。また、子供主体の授業になるように、児童への細かな手立てを検討していく。また、研究授業を参観する際の授業参観の視点にもなり、教師同士が学び合う視点ともなる。

（1）主体的に学ぶための手立て

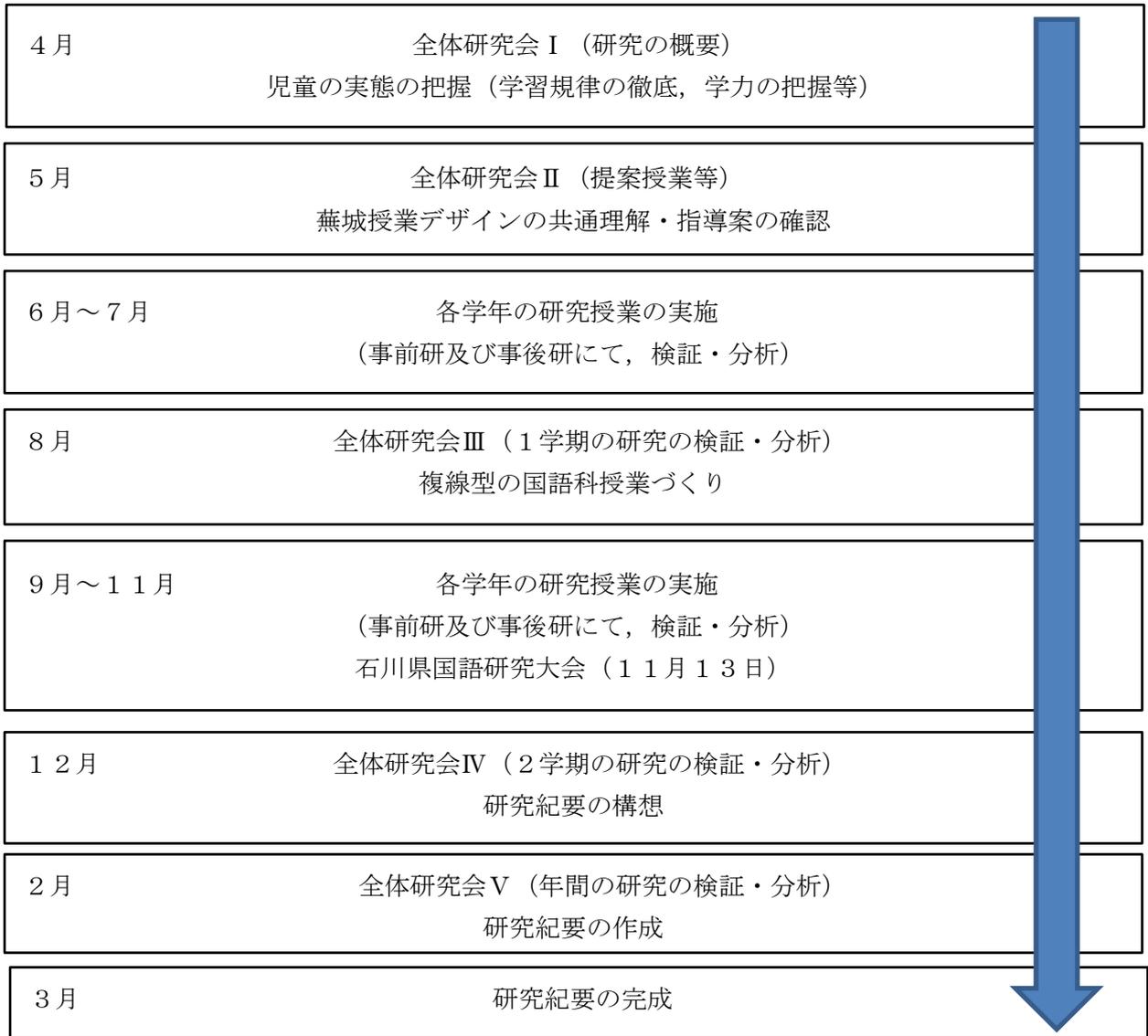
児童が単元を通して、教材と向き合い、教材から問いを見出し、解決するための手立てを講じることで主体的に学ぶ児童を育成する。児童に付けたい資質・能力を明確にして、ゴールとなる姿を視覚化することで、児童が単元を通して主体的に学ぶことができる。児童が主体的に学んでいくために、学び方（見方・考え方）を働かせることや、学び方を自己決定させることが大切になってくる。また、学びと変容を自覚させるために、学びを自己調整したりふりかえったりする場を設定する。

（2）協働的に学び合うための手立て

教師が児童に指示する交流ではなく、自らの必要感を感じたタイミングや時間で交流することで、自立した学習者の素地が育まれる。児童が個人で考える、複数で考える場や時を自己決定し、協働的に自己の問いを解決させていきたい。そのための学習環境の充実を図っていく。自分の考えを持てるようにするために、思考を促す学習履歴や個別最適な学びにつながる教材の工夫なども考えられる。協働的に学び合えるように、効果的なICT活用も合わせて進めていきたい。

(3) 全体研究会の設定

校内研究を計画的に推進するために、年度初めや年度末、学期の節目等に全体研究会を設定し、研究の成果と課題を短スパンで検証していく。以下のような流れで研究を推進していく。



6 蕪城授業デザイン

今年度は、国語科を軸にした単元全体を見通した授業デザインを推進していく。授業者が単元の資質・能力を理解し、言語活動を通して児童が主体的、協働的に学習を進めていくように、蕪城授業デザインを構築していく。

○単元の導入場面

- ・単元を通してつきたい力の明確化
- ・魅力ある言語活動モデルの提示
- ・解決の見通しが持てる学習計画
- ・学びの方向性を自己決定

<本時の授業デザイン>

学習過程	目指す子供の姿	授業づくりのポイント
つかむ	<ul style="list-style-type: none"> ○今日の課題をつかむ ・～について学ぶよ ・～を解決したいな ○学習の見通しをもつ ・～すれば解決できそう 	<ul style="list-style-type: none"> ○掲示や板書による見通し ・学習課題の共有（単元・本時） ・既習とのつながりやズレ ・解決の見通し ○自力解決するための学習環境 ・個別最適な学びにつながる教材教具の工夫 ・学び方を自己決定できる場面 ・学習の足跡がわかる手立て
考える	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の考えをもつ ・～が使えるよ ・こうやって考えたよ 	<ul style="list-style-type: none"> ○協働的に学ぶ場の設定 ・効果的な ICT の活用（視覚化・共有化・共同作業） ・目的意識、相手意識を持ち交流する場の設定 ・学び方（見方・考え方） ○教師による見取り ・意欲を引き出す ・見通しを持たせる
深め合う	<ul style="list-style-type: none"> ○協働的に学びを深める ・友達の考えを聞きたい ・～の方法で進めよう ・いっしょに考えたいな ・もっと考えたいな ・もっと教えてもらいたい 	<ul style="list-style-type: none"> ○教師による見取り ・意欲を引き出す ・見通しを持たせる ○学びの変容を自覚する手立て ・学び方がわかる ・ふりかえりの交流
まとめる ふりかえり	<ul style="list-style-type: none"> ○今日の学びを確かめる ・今日の課題は～だ ・～がわかったよ ・次は～したいな 	<ul style="list-style-type: none"> ○教師による見取り ・意欲を引き出す ・見通しを持たせる ○学びの変容を自覚する手立て ・学び方がわかる ・ふりかえりの交流

主体的に学ぶための手立て

協働的に学び合うための手立て

学びや変容を自覚できる手立て

○単元の終末場面

- ・「できた」「わかった」が実感できる場の設定
- ・学びや変容を自覚できるふりかえり

7 研究構想図

学校教育目標

未来を生き抜く人間の育成
～進んで考え、協働して課題を解決する子の育成～

白山市 指導の重点

- ・確かな学力・豊かな心・健やかな体の育成
- ・地域に根ざした、特色ある学校の創造
- ・安全・安心な教育環境の整備

いしかわ学びの指針12か条プラス

- ・活用力を高める授業づくり
- ・学力・学習を支える基盤づくり
- ・指導改善を進める体制づくり

めざす児童像（教師の願い）

- ① 考え伝え、学び合う子 … 「考える子」
- ② 規律正しく、主体的な子 … 「やさしい子」
- ③ 健康・安全な子 … 「たくましい子」

【カリマネの柱】 自立した学習者

主体的・協働的に学び合う子の育成

～子供主体の授業づくりを通して～

主体的に学ぶ工夫

- ・言語活動の工夫
- ・単元デザイン(見通し・問い)
- ・学び方(見方・考え方)
- ・個別最適な学び
- ・学びと変容の自覚化

協働的に学び合う工夫

- ・思考を促す学習履歴
- ・自己決定できる学習形態
- ・協働的に学ぶ場の設定
- ・学習環境の充実

子供の見取り

効果的な ICT 活

校内OJT
若プロ

授業力向上

生徒指導との連携

生徒指導の4つの視点

家庭学習の充実

家庭との連携

あたたかな人間関係の構築